

一番のプレゼント

西田美樹 — 元新聞記者

『ルージュの伝言』 松任谷由実/角川書店/1983年



たまに読む女性向けビジネス雑誌で、ある女性のキャリアにおける浮き沈みを紹介していた。仕事が軌道に乗った「絶頂期」、育児のためそれまでの働き方に無理が出る「停滞期」などがグラフで示され「私は停滞期をどう乗り越えたか」というエピソードが語られる。

私の半生を振り返ってみれば、一番の停滞期は高校時代だった。中学でガシガシ勉強して学区外の進学校に入ったはいいけれど、できる人たちの中で埋没。通学には片道1時間かかり、帰宅する頃には疲れ果て、自宅学習の気力もない。成績は底辺をうろうろし、親の当たりもきつかった。家も学校も居心地がいいとは言えなかった。

地元から同じ高校に進んだMちゃんの状況も似たようなもので、登下校の電車内で愚痴を言い合った。唯一の気晴らしは音楽を聴くことだった。ある日、Mちゃんが「これ、聞いてみて」と貸してくれたユーミンのアルバムに入っていたのが「ANNIVERSARY」だった。

“今はわかるの 苦い日々の意味も ひたむきならば やさしいきのうになる”

ドラマチックなメロディーとたった2フレーズの歌詞が、とにかく未来に向かって生きていけばいいことがあるはず…という希望をくれた。

その頃図書館で見つけた本書の冒頭で、ユーミンは「他人がどう思おうと私は天才です」と言い切っていた。なんて格好いいんだろう。私にとってユーミンは自由の象徴だった。ユーミンのアルバムは1970年代、80年代、90年代、2000年代、2010年代の5つの年代でオリコン週間ランキング1位を獲得している。「時代を共に歩んだ」と思えるアーティストがいるのは幸せなことだ。

CDが売れない時代だそうだが、プレゼントに一番いいのはCDではないかと今でも思っている。贈った相手が感想を伝えてくれたら嬉しいし、一緒に聞いたら共通の記憶がいつまでも残る。気になる人と貸し借りをするのもいい。自然と接点が生まれるから。

結婚前、何人かの男性とドライブしたことがある。車中で流す曲にも個性が表れる。O君はカーディガンの「Carnival」を繰り返しかけた。「Come on and love me

now、Come on and love me now〜」。はいはい、分かりましたよと微笑する。H君の選曲はプラターズの「Only you」。空気が少し重くなった。残念ながらどちらの人とも付き合うまではいかなかった。

社会人になってから出会ったNさんは、ビートルズの赤盤・青盤を貸してくれ「それぞれ10回は聞き込むように」と上から目線だった。しかし、なぜか私を良い方向に導いてくれると錯覚してしまい、程なく結婚した。 🗨️